

中小企業を支援するための広報誌

SUNTECS

[広報サンテックス]

Industrial creation
and job growth

No.353

新 2017
年号

NEW YEAR

経営者
インタビュー

地域密着でトップクラスの
技術力を誇る島原半島の
「下町ロケット」

株式会社 新田鉄工所

代表取締役
社長

松尾 良弘 氏

九州教員株式会社
代表取締役社長 船橋 修一氏

「いまなぜCSV経営なのか？」
その物理的考察

企業が収益性を確保しながら社会価値を生み出し、
事業活動を通じ社会的価値や企業価値を高めてゆく経営戦略

財団からのお知らせ

- 平成28年度 企業誘致の取組み状況
- 平成28年度 企業誘致実績(11月末現在)



公益財団法人長崎県産業振興財団

中小企業支援
ポータルサイト

よかネット長崎

よかネット長崎 または 長崎県産業振興財団





時代とともに変化し たどり着いた CSV 経営

「いまなぜ CSV 経営なのか？」 その物理的考察

企業が収益性を確保しながら社会価値を生み出し、
事業活動を通じ社会的価値や企業価値を高めてゆく経営戦略



九州教具株式会社
代表取締役社長 船橋 修一

時間は双方向性だと考える

『ある物理系の「現在の状態」は、その系がたどってきた「過去」だけでなく、これから進む「未来」によって決定されている。量子力学の方程式は時間について対称なので、未来から現在にさかのぼるような方程式も可能なのだ』

のっけからわけのわからないことを書いて申し訳ありません。冒頭の文章はイスラエルの物理学者 ヤキール・アハラノフ[1932-]の言葉です。

前回は「時代のパラダイムは「政治の時代」⇒「経済の時代」⇒「文化の時代」を循環する」というキーワードで述べてみました。私は、いろんな高名な経営者が最後は宗教論や人生訓、輪廻転生にいきついて人生を語ることにじつは納得できませんでした。

それは経営者に限りません。あの理論物理学者のエルヴィン・シュレーディンガー[1887-1961]ですら若いころ古代インドのヴェーダーンタ哲学に傾倒して輪廻転生や解脱、靈魂の不滅も論じたくらいなのです。

でもここでそれを論じては昭和の偉大な経営者の二番煎じになってしまっています。現代はシュレーディンガーの生まれた19世紀とは科学も物理学も大きく進歩しました。冒頭のアハラノフは「時間の双方向性」について述べています。

つまり、われわれはこれまでの常識どおりの、過去の経験の結果、現在がある・・・という考え方だけでは不十分なのです。

「事実前提の人生」と「価値前提の人生」

それを、過去の経験で判断し、その場その場のご都合主義の人生を「事実前提の人生」と定義しましょう。では、「時間が双方向性」ならば、未来に基準を置き、どのような未来であるべきか？という価値を明確にする。これから過去にさかのぼって現在があるという考え方を「価値前提の人生」と定義しましょう。

そうすると、「事実前提の人生」の現在と、「価値前提の人生」の現在は次元が違ってきます。それは、「過去の事実」は確定しているのに対し、「あるべき未来」はパラレルワールドであり、たくさん未来世界があるからです。あなたにとって都合のよい未来もあればそうでない未来もある。われわれはその中の「ある未来を選択」して生きている。おそらく無意識での選択でしょうが・・・

多くの人が時間は「過去から未来への一方通行」だと信じて疑いません。ゆえに「事実前提」の人生を生きている。その場合ほとんどの人は、ああすればよかった。こうすれば・・・と、自分の過ごした人生を悔やみ、後悔して生きている。時間は連続していますから、過去を悔やむものは、自然と未来への向きあい方も「心配」し「不安」な未来を思い描くでしょう。

そして、そのような未来もパラレルな未来には必ずあり、あなたが潜在的に予想したとおりの不安な未来を選択するのです・・・無意識の選択でしょうが。

ところが、「価値前提の人生」はこれと逆発想となります。

自分にとってあるべき未来を明確にした場合、それは自分にとって理想的な都合の良い未来であるはず。つまり「意識的に」パラレルな未来の中のある特定の「未来」を意識的に選択することとなります。

そして、予想通りの希望の未来を選択するのです。なぜならば、その未来からさかのぼったいま現在、なにをなすべきか？を考えるからです。この発想は、過去の事実をも変えます。いや、正確にいうと過去の事実は変わりませんが、過去の辛かった事実ですら、現在の希望的未来に繋がるためのマイルストーンだったのだ・・・過去の意味づけを肯定するようになります。これが「時間の双方向性」がもたらす効果のメカニズムです。

「あるべき都合のよい未来」に根拠は必要ありません。「根拠」という発想そのものが過去思考であり「事実前提の人生」の考え方です。「あるべき都合のよい未来」を想定した場合、さかのぼって今があるのだから、その「根拠」はいま現在作るようになります。

発想を逆転させるのではない。 時代が逆転しているから 順応するだけだ

九州教具は、このような「時間の双方向性」の考えのもとに、「経済の時代」の常識をひっくり返して、役職者は上が決めるのではなく、やりたいものが手を挙げる「立候補制」にしています。未来は誰かが与えてくれるものではない。自らが望むものだからです。ちなみに日本全国で役職者の立候補制度を採用しているのは、九州教具だけだそうです。

「あるべき都合のよい未来」を想定したものが、その「根拠」をつくるべく「立候補」し経験を積むのです。過去の実績で評価されて昇進する「経済の時代」の常識を「文化の時代」にあわせ逆転させました。歴史をみればこのようなことは何度も起きているし、時代の覇者はそれに対応しているのがわかります。それは同時代のマジョリティからは「奇妙に」見える。

前回も申し上げたように「経済の時代」の成功体験は「文化の時代」には役に立ちません。役に立たないだけでなく害悪にさえなる可能性があります。近年の事例をみてみましょう。

1867年第15代将軍 徳川慶喜[1866-1913]公によって大政奉還が行われ、鎌倉幕府成立から670年も続いた「武士の文化」というものを、明治維新はわずか10年で否定したのです。

時代が逆転したら武士も農民もありません。常識だった刀もちゃんまげも非常識になりました。

対応できない人もたくさんいました。これが過去の話になると対応できないことが不思議に感じますが、時代が逆転したことが信じられなかったのです。あなたもそうではありませんか？

「文化の時代」の本質的意味

もうひとつ例をあげましょう。「経済の時代」から「文化の時代」への移行を象徴する問題が「原発問題」です。かつて原発は経済合理性から容認されていました。事故など「ありえない」と言われていました。しかし「ありえない事故」は起きてしまいました。

- これから原発をどうしていくのか？
- 優先すべきは経済合理性なのか安全性なのか？
- 原発の技術開発をどう考えていくのか？
- 様々なオプションの中で何を決めていくのか？

理系の専門知識だけでも、文系の経済知識だけでも、答は出てきません。あれから5年以上たつたにもかかわらず何も決まっていません。まさに「事実前提の人生」です。これを解決するには、既存の枠組みを一歩も二歩も踏み出さなければ、「対応不可能」です。みなさんの考えも一人ひとり違うはず。『経済の時代』のように、損か得かで結論がでないのです。『経済の時代』にはこの原発問題は表面化しませんでした。現在が『文化の時代』であるから、経済合理性だけでは納得できなくなったのです。お金の価値だけが幸福につながらないことにみんなが気づいたからです。そんな「答のない文化の時代」に必要なものとはなんでしょう？

それが「教養」なのです。「教養」は「経済の時代」のような学問や学歴ではありません。

教養とは人を思いやる心であり、人格であり、「人の役に立つ」ための学びです。既存の枠組みでは、役に立たないかもしれない。「経済の時代」なら「人の役に立つ」前に「自分の役に立つ」ことをしろ！と言われたでしょう。それが人間をここまで孤立させ分断させてしまった。けれども、まだ見ぬ未来に必須の新しい思考体系をもたらしてくれるかもしれない。

それが「教養」なのです。世界の何人(なんびと)も一人では生きてはいけません。

「文化の時代」は〈How=どのように〉ではなく〈Why=なぜ〉

拡大する時代でもある「経済の時代」は〈How=どのように〉で深く考えなくとも、人まねをすれば恰好がつかいましたが、縮小する時代でもある「文化の時代」は〈Why=なぜ〉が重要です。「文化の時代」は〈正しい答え〉の存在しない世界です。答えを自ら模索していくことが求められています。価値観が多様化し、枠組みそのものをどう決めるかという「文化の時代」には、実はこうした「経済的時代」的、決められた枠組みの中だけで「できる人間」や「専門家」は、新しい「文化の時代」には対応できない、新しいアイデアが出せない「使えないやつ」となってしまうのです。つまり「文化の時代」は、「教養」こそが新たなビジネスにつながる時代でもあるのです。